天平寶字六年十一月一日上

〔竹取物語〕日暮ぬれば、かのつかさ〇大炊寮におはして見給ふに、誠につばくらめ巣つくれり、〇中略あつまりてとくおろさんとて、綱を引すぐしてつなたゆるときに、やしまのかなへのうへにのけざまにおちたまへり、

〇按ズルニ、大炊寮ノ大八島竈神ノ事ハ、神祇部官衙神篇ニ在リ、參看スベシ

〔空穗物語吹上之下〕うすひとつに女ども八人たてり、よねしらげたり、これはみかしぎ、玄ろがね。あしがなへ、おなじこしきして、きたのかたぬしのおものかしぐ、

〔拾遺和歌集七物名〕あしがなへ　すけみ

津の國のなにはわたりにつくる田はあしかなへかとえこそ見わかね

〔藤原仲文集〕うりたるかなへを、こよなくこひおこしたりければ、うる人、ちうごくの鼎にもこそにえ給へ　おほくのせになおとし給ひそ

かへし

かうよりもうるこそ罪は重げなれむべこそかまの底にありけれ

〔徒然草上〕是も仁和寺の法師、童の法師にならんとする名殘とて、各あそぶ事有けるに、醉て興に入あまり、かたはらなるあしがなへをとりて、頭にかづきたれば、つまるやうにするを、鼻ををしひらめて、かほをさし入て舞出たるに、滿座興に入事かぎりなし、玄ばしかなでゝ後ぬかんとするに、おほかたぬかれず、酒宴ことさめて、いかゞはせんとまどひけり、とかくすれば、くびのまはりかけて血たり、たゞ腫にはれみちて、いきもつまりければ、うちわらんとすれど、たやすくわれず、ひゞきてたへがたかりければ、かなはですべきやうなくて、三あしなるつのゝうへに、かたびらをうちかけて、手をひき杖をつかせて、京なるくすしのがりゐて行ける、道すがら人のあやし